

# 第一章 震災直後



全壊した西野幼稚園

## 一 ニワトリさんちゃんと逃げたかな

### 震災体験をバネにして

神戸を襲った震度七という激震により、私の前任の御影幼稚園は全壊してしまった。

この園は、創立百周年を数える歴史の古い幼稚園である。戦災で消失し、その後再建されて四十五年を経た木造の園舎であった。

### 幼児たちの消息を求めて

交通網は途絶し、二輪車・徒歩しか交通手段のなかった中で、何らかの方法でやっと出勤してきた教職員と共に、幼児たちの消息を求めてあちこち尋ね歩いた。御影の町は、跡形もなく壊滅状態で、倒壊家屋が道をふさぎ、鉄道の高架は垂れ下り、歩くのも困難な状態であった。個々の幼児たちの家を訪ねて全員の安否を確かめるのは不可能な状況であったので、とりあえず避難所に当てられている近隣の小・中学校に行ってみた。やっとたどり着いた避難所で会った幼児たちは、恐怖と異常な状況のため黙りこくり、引きつった表情を見せていた。言葉をかけると、「先生」とそれでも笑顔を見せてくれたが、ショックの大きさがその表情からよみとれ、事態の深刻さがうかがわれた。

幼児たちの自宅は、過半数が全半壊しており、全員の消息がつかめたのは、震災から一週間余りたってからであった。

## 幼稚園の再開

私たちは、幼児たちの恐怖や緊張感が和らげばと思ひ、遠方に疎開している幼児たちには電話や手紙で、避難所にいる幼児たちには度々訪問して励ました。しかし、訪ねる度に、幼児たちの表情が暗くなつていくのが気がかりであつた。公園や学校の運動場は避難住民のテントや車であふれ、道路は歩くのさえも危険であつた。遊び場や遊び友達をなくした幼児たちに、元の活気を取り戻させるためには、一日も早く幼稚園を再開し、そこで楽しく過ごさせることが何より大切ではないかと考へた。隣接する小学校はどの教室も避難住民でいっぱいであつたが、学校側のはからいで市民図書館開放教室を借用することができ、安全点検をすませた後、そこで保育を再開することにした。

再開当日（二月十三日）、登園できたのは八十一人中二十八人であつた。保護者同士は涙の再開であつたが、幼児たちは友達と抱き合つたり、肩をたたき合つたりして、久しぶりの再開を喜んでゐた。

五歳の幼児たちがこんなにも友達や幼稚園を大切に思ひ、登園することを楽しみにしてゐる姿をまのあたりにして、幼稚園が、幼児たちの生活の中心になつてゐたことを改めて知つた思ひがした。

幼稚園再開の三日前には、隣接する小学校も再開されてゐた。まだ水道やガス等のライフラインが復旧してゐなかつたが、幼稚園、学校の再開にともない疎開先から自宅に帰つてきた子供も多く、登園する幼児の数は日を追つて増えてきた。中にはどうしても友達に会いたいかからと、大阪・尼崎・三木・三田市などの疎開先から一時間余りもかけて園に通つてくる幼児もあつた。

大阪市に疎開している隆君は、朝起きるのが苦手であつたが、震災後は朝六時には目を覚まし、身仕度をすませ、「さあ、幼稚園に行くこう」と登園をせがむのだという。このように、幼児たちの熱意にほださ

れて遠方からバスや電車を乗り継ぎ、幼稚園に幼児を連れてきた保護者も多かった。保護者自身も、幼稚園で教師や顔見知りの保護者と話し合ったり、励まし合ったりすることが楽しみであったようだ。幼稚園が保護者にとっても心の安定の場となっていた。

### 救急車 大きらい！

三月になったある日のこと。砂場で友達と仲良く遊んでいた友子。救急車のサイレンが聞こえてくると「私、救急車大きらい！」と両手で耳をふさいで保育室に駆け込んできた。

震災後、ひっきりなしに聞こえていた救急車のサイレンとヘリコプターの音は耳について離れない。このように、サイレンやヘリコプターの音には異常に反応する幼児がいる。これらの音を聞くと、地震の恐怖と当時のあの緊迫した雰囲気を感じ出すのだろう。

また、進君のように「毛布大きらい」という幼児もいる。亡くなられた方の遺体を毛布で覆っていたからだという。夜寝るとき、今でも決して毛布を使わないそうである。

大方の幼児たちは、寝ている上に家具やテレビが落ちてきて、暗やみの中で恐怖体験を味わった。震災以後、家庭では幼児たちに、次のような変化が見られた。

- ・暗闇を極端に恐がり、電気をつけないと寝られない。
- ・地震や火事に関する遊びをしたり、絵をよくかいたりする。
- ・ちよっとしたことで泣いたり、幼児語を使ったりする。

これらの症状は地震のストレスからくるものであり、専門家からも指導を受けながら、スキンシップを

図り、不安を取りのぞくように努めた。

### 不自由な生活の中でも

ブランコに乗っている册子、「震度一、震度二、震度三」といいながらブランコを揺すっている。幼児たちは、覚えた言葉を素早く遊びに取り入れていく。「給水車」「避難所」「救援物資」「ボランティア」この度の震災を通して、このような耳慣れない言葉をうまく使って遊んでいる。幼児たちの明るさ、たくましさ、ともすれば落ち込みそうになる私たちは、大いに励まされ、力づけられたような気がする。

「先生、私とこ、おうち見つかってん。六人キューキュー詰め」「ぼくとこの家、昨日解体やつてん。でも、車助かってよかったつてお父さんいつてた」「昨日ガスきてん。お風呂に入れて気持ちよかったよ」と等と震災後、幼児たちはこのようなことをよく私たちに話してくれた。幼児たちは、環境に敏感に反応して生活している。そして、家族の喜びが幼児たちの心を明るくする。幼児なりに家のことが、やはり一番の関心事だったのであろう。

震災後七か月が経過し、幼児たちは、表面的には以前と変わりがないように見える。しかし、七月七日の七夕祭りの笹飾りの短冊には「もう一生地震が起きませんように」「怖い地震がきませんように」等と地震に関する願いを書いている幼児を多く見かけた。

また、ある精神科医から、「『最近チック症状がひどい』と診察を受けにくる子供が増えている」という話も聞いた。この幼児たちの心の傷が完全に癒えるには、まだまだ時間がかかるだろう。

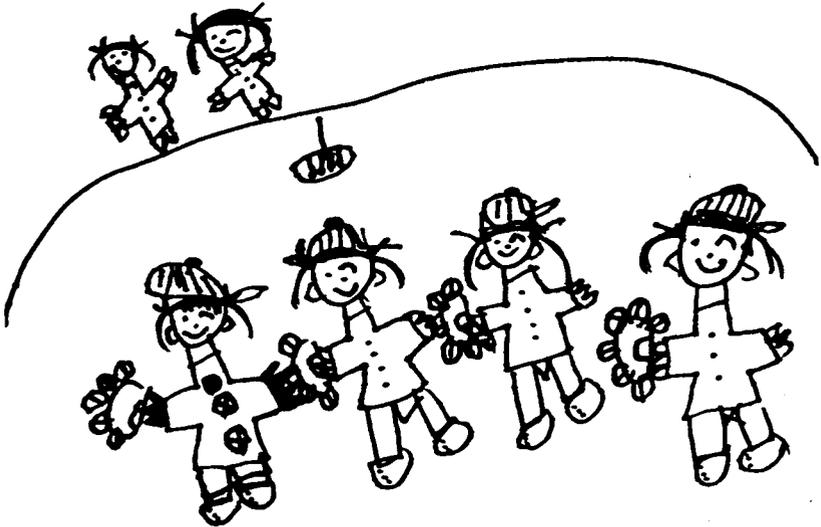
私は、この幼児たちと同じ年令であつた昭和二十年三月十七日、神戸大空襲の戦火に追われて町中を逃げ回つた体験をもっている。

今、振り返ってみると、あの時とあとの後の苦しかった体験が、私の生き方に強い影響を与えたように思われてならない。

この震災という辛く恐ろしい出来事に遭遇した幼児たちが、挫けず、この体験をバネにして、強く、たくましく生きてほしいと願っている。

平成六年度 御影幼稚園長

南 佑子



「くすのき」の木片に願いを託して

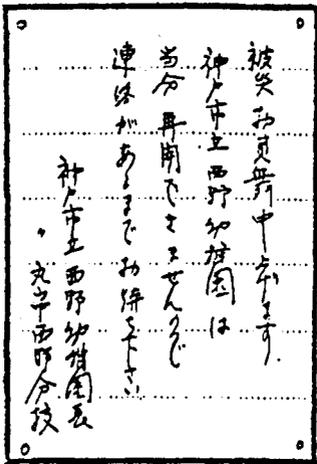
伝統ある木造園舎の崩壊

築後約九十年、神戸大空襲でも焼け残り、地域の人々のシンボルだった西野幼稚園。その白い板壁に緑の瓦屋根といった明治末期の洋館造りの園舎は、そこに集う者に、何かしらホッとした安らぎをもたらしてくれる建物であった。しかし、一月十七日、午前五時四十六分、この時を境に、伝統ある木造園舎は、無残な姿に変わり果ててしまった。

建物自体が大きく北側に傾き、保育室の土壁はそげ落ち、ガラス戸は全部割れ落ちてしまった。

園庭は、地域住民のための貯水タンクが埋まっているため、大きく円形状に地割れが走っている。

そこに、家屋の倒壊した付近の住民が、毛布にくるまって集っていた。幼稚園の運動場なら安全と思っ  
たらしい。



1月21日 園児への連絡、避難先確認のため、このような貼り紙をする。

この日の午後には、二十八人程の人々が遊戯室に避難し始めたが、避難所としては認められていなかった。救援物資は一切届かなかった。どこに連絡を取ればよいのか、取り合えず長田区役所に出向き、援助物資配布を依頼し、救援対策本部に被災状況を報告した。連日、震度三程度の余震が続き、建物崩壊の危険性が高いということで、即、園舎解体が決定した。

一月十九日からは、在園児の安否確認と平行して、沿革史、証書台帳などの重要書類の取り出しを始めた。とはいえ、いつ余震が起きるか分からない中で危険な作業のため、教職員は互いに細心の注意を払うよう確かめ合った。一步建物の中へ足を踏み入れると、その崩壊ぶりはすさまじい。二階にある職員室へは、両脇が土砂で埋まった階段を昇らなければならなかった。そこを昇り降りしながら、物品や書類の持ち出しを行った。教職員の手には負えない大型の物品は、解体の際、業者が持ち出してくれることになった。

一方、園舎の解体工事は、いざかかるとなると、園周辺の家屋の崩壊により、どの方面からの道も全てふさがれてしまい、大型の重機が入れないことが分かった。また、周辺の民家の方と連絡を取ろうにも、行き先が分からず、工事はできない。そのうち園舎は、だんだんと北側市営住宅の方向へ倒れかけていく。そこで、比較的被害の少ない別棟の遊戯室を壊し、そこから大型重機が出入りすることになった。

一月二十三日には、西野幼稚園事務局を兵庫幼稚園内に置くことに決まり、翌二十四日からは、兵庫幼稚園での事務局移転作業を開始した。「先生ニワトリさなどないしとう?」「ちゃんと逃げたんかなあ」「はよ幼稚園行って、また太鼓したいわ……」避難所回りをする中で耳にした、幼児の言葉に動かされ、グラウンドピアノや和太鼓などの大型楽器類や、飼育動物も兵庫幼稚園の好意で、当分の間、預かってもらうことになった。



一月二十七日、具体的な園舎解体日程が決まり、幼稚園周辺に立入禁止のロープを張り、周辺の全壊家屋に連絡を取り、園舎解体工事の旨を知らせた。

二月六日より遊戯室の取り壊しが始まる。

二月九日から、いよいよ本館の取り壊しが始まった。午前八時、教職員と数人の保護者・幼児が見守る中、大型パワーショベルカーと圧搾機が、土けむりを立てながらうなり始めた。地震直後から、毎日写真を撮り続けてきたが、この日はやはり目の前で壊されていく園舎に、無念の涙が止まらなかった。園歌にも歌われた大きな「くすのき」も、工事に支障をきたすとのことで、五本中二本が切り倒された。

幼児たちが「仲良しの木」と銘うって、毎日世話をしたり、鬼ごっこやかくれんぼの隠れ場所になったりした思い出深い木である。大きな根が園庭にドーンと横たわり、強い臭いを放っている。まるで「まだ生きてるんだよ」と、切々と訴えかけてくるように思われた。そこで、何とかこの「くすのき」を生かすことはできないのかと考え、直径十五センチメートルほどの枝を使ってコースターのような円板に仕立て、「贈西野幼」と焼印を入れて、在園児や地域の関係者に配ることにした。

「歳月は流れても、この円板にはいろいろな人のいろいろな思いが込められていることを忘れないでほしい」そう念じながら……。



西野幼稚園と共に歴史を刻み、園歌にも歌われた「くすのき」のコースター

## 幼稚園再開に向けて

震災が起こり、何よりも気がかりだったことは、幼児たちの安否だった。避難所を回ったり、電話連絡をしたりして、一人一人の様子や居所を確認していった。家屋が全壊し、数時間も家族と瓦礫の下に生き埋めになっていた幼児や、火災で住宅を焼失した幼児も数名いた。幼児たちの避難先は様々で、兵庫県下をはじめとして、遠くは山形・熊本・岡山・広島など、保護者の実家や親類の家などへ、ライフラインの断たれた神戸から避難していた。そのため、なかなか連絡がつかない幼児もおり、結局、全員の居所が確認できたのは一月二十八日だった。在園児六十四名中、数名を除いてほとんどの幼児の住宅が、全半壊・全焼などの被害を受けたが、全員の無事が確認されたことは奇跡的だったと言える。

幼稚園の園舎が全壊し、再開のめどがたたないまま、家庭訪問や避難所訪問が始まった。御蔵小学校、水木小学校、長田公民館、兵庫高等学校、夢野台高等学校など、避難場所は広範囲にわたり、また、どの避難所も人であふれ、階段やグラウンドまでいっばいで、自分たちの場所をどうにか確保しているという感じだった。

そんな中で、普段はあまり教師に甘えてくるようなことのない幼児も、顔を見るなり「あつ、先生や」と飛びついてくる。地震が起こったことを幼児なりに受け止めているようで、「ごっつい揺れてこわかった」また『震度七』がくるかもしれないへんって言うといったで、地震の恐ろしさや揺れの大きさなどを、短い言葉ではあるが口々に訴えてきた。

園再開のめどはたっていないが、毎日の家庭訪問・避難所訪問で、どのように幼児たちに接していくべきか、教職員間で何度も話し合いをもった。また余震の恐怖もあり、日々の生活のために、人々が必死に

なっている中で、幼児の心が少しでもなごむように配慮をしていくことにした。そして、保育とはいかないまでも、避難所や家庭訪問先での幼児たちとのふれあいの時間を大切にしていた。幼稚園で歌っていた歌を、幼児と一緒に口ずさんだり、手遊びをしたりした。「先生、早く幼稚園が始まったらええのに」「前みたいに、みんなでかくれんぼがしたいな」など、少しずつ幼児たちも自分の思いを出してくるようになった。毎日、少しの時間でも一緒に過ごし、遊ぶことで緊張がとけ、幼児の心がほぐれてきたような感じを受けた。また、幼児たちの様子を知らせたり、幼稚園のことを連絡したりするため、臨時の幼稚園だよりを作成し、一軒一軒配布していった。園と連絡を密にとり合うことで、保護者に安心感も生まれてきた。早く幼稚園が再開すればいいのに、という思いは保護者も同じであった。

こうして、幼児、保護者、教職員の園再開への希望と期待は、日毎に高まっていった。

二月三日、「二月末までには、全校園完全再開を目指しているので、青空教室でもよいから場所を確保するように」と、教育委員会より連絡を受けた。園舎解体と同時に、プレハブ園舎を建てる約束で教職員共に適当な候補地を捜して歩いた。

長田区役所は避難所として満杯で余裕なし、長田文化会館は、建物自体に崩壊の危険性がある。近くの公園はスペースはあるが、目の前の市住十九号棟が崩れかけていて、近寄ることは危険、行く先々で場所を見つけることの難しさを思い知らされた。ようやく兵庫勤労市民センターの三階の一室を候補地として依頼することになった。ジュウタン敷で明るいし、屋上広場もある。一階はスーパードなので、保護者は買物することもできる。最適と思われたが、文部省の設置基準で、三階建ては不可という回答が返ってきた。

それから数日後、兵庫幼稚園で合同保育をする案が持ち上がったが、兵庫幼稚園は五歳児一年保育であり、西野幼稚園は二年保育の幼稚園である。そこで保護者の心情も考え、兵庫幼稚園が午前中、西野幼稚園は午後から保育をするという、二部制を実施することになった。再開は二月二十四日と決まった。

二月十日からは、それに向けての諸準備に追われた。「つうえんノート」をなくした幼児もいるので「つうえんカード」を別に作った。園再開についてのプリント類も郵送、または、手渡ししの形で全員に渡すように配慮した。今までとは違う、不慣れな場所への通園になるので、付近の地図をつけ目安となる道順を記入し一人ずつに渡した。

二月二十四日、兵庫幼稚園を借りての園再開の日がやってきた。神戸市立校園で最後の再開ということ、当日は、多数のマスコミの取材もあり、教職員も、朝から興奮気味であった。

午後一時、幼児たちがはさむような笑顔で登園してきた。教職員も保護者もうれしさの余り、抱き合つて再開を喜んだ。幼児たちは、初めての園庭を所狭しと駆け回り、地震以来自由に走り回れなかった不満を、一気に解消しているようであった。

しばらくの自由遊びの後、みんなで久しぶりの西野太鼓を打ちならした。太鼓の力強い音と共に幼児たちのあふれるエネルギーが、大空にこだましていた。六十四名中四十名が登園できたことを、心からうれしく思った。

こうして、修了式まで兵庫幼稚園を借りての保育が続いた。その間、グリーンスタジアム神戸での「がんばれ神戸っ子」の催しに参加したり、兵庫幼稚園との交流保育を計画したりするなど、少しでも幼児が

のびのびと遊べるようにと考えた。幼児たちに笑顔が戻り、保護者にも気持ちの余裕ができてくると、やはり一番気にかかるとは、幼稚園がいつどこに建つのかということであった。

修了式は、幼児や保護者、教職員も西野幼稚園の園庭で挙行したいと願い、解体跡の園庭を下見し青空修了式を考えたが、諸般の事情を考慮して兵庫幼稚園で行うことに決め、三月十八日、第七十一回修了式を、午後一時より兵庫幼稚園遊戯室にて、皆様のご尽力により挙行することができた。

三月二十日、PTA会長、副会長、役員が署名をもって来園される。在園児、修了児など、多数の方々の西野幼稚園の早期再建を願った、思いのこもった署名であった。

幼児、保護者、教職員そして西野幼稚園をいつまでも愛し、支援してくださっている方々の期待にそえるような園舎建設を願ってやまない。



コースターをつくる教職員

## 在園児の安否確認

一、全半壊家屋で道路寸断、倒壊家屋からの救出

園区内は、木造家屋が多く、殆どが全壊、半壊の状態で道路は遮断されていた。静まり返った中で、倒壊家屋から救出している人々の声が聞こえる。幼児、保護者の無事を祈る。九時に園に到着。門には避難住民がいまやおそしと教職員のくるのを待っていた。

## 二、避難住民の対応と幼児の安否確認

当日の午前中は、避難住民に五保育室を開放し、園舎、園庭の被害確認と危険箇所への応急処置に追われる。管理棟内の被害が大きく、園児名簿を取り出せず電話も不通。管理員と園長の二名では手が足りない。はやる気持ちを押さえつつ、午後、管理員を園に残し、在園児の安否確認に地域に出かけた。児童館、文化会館、小学校等で、在園児や保護者、修了児の保護者に会い、生きていることを喜び合い、情報を得ることができた。小規模園であったため、間接的ではあったが、一日目にして在園児については、家族とも全員無事であることがわかりひと安心した。

二日目の朝。避難住民のざわめきで仮眠から飛び起きる。東灘区南部でガス爆発の恐れあり、国道二号线以北へ避難せよとラジオ放送があったとのこと。最後の確認をし、静まり返った町中を北へ向け園をあとにした。移動先の中学校でも、数人の在園児と保護者に出会い情報交換を励ましあった。

三日目～五日目。避難住民の件で、地域の方、自衛隊の方との連絡、対応に明け暮れた。その間もいろいろな方から在園児の情報を得ることができた。

五日目。やっと全教職員が揃い、家庭訪問を行った。しかし、ガス爆発の件で、約半数の幼児は、家族と親戚、知人を頼って疎開していた。行き先を他の保護者に連絡をしたり、近隣の人に伝えてくれた人もあり、消息を確かめるのに助かった。しかし、数人の所在が判明しないまま日が過ぎた。教職員も地域にでて救援物資の配布を手伝い、ボランティア活動に励む中で、幼児の所在を知ったり、地域の銭湯で湯につかりながら情報を得たりした時は、本当に嬉しかった。

### 三、安否確認に必要なこと

- (一) 園児名簿は、どんなときでも携帯しておく。
- (二) 保護者に緊急事態が起きた時は、必ず園へ連絡することを常時徹底しておく。
- (三) 兄弟や修了児の保護者とのつながりも大事にし、何かの行事を通して顔見知りになっておく。
- (四) 日頃から、地域の人との関わりを大切にしておく。

震災対応の経験を通して、地域に開かれた幼稚園であることや、教職員が地域に出かけ、幼児、保護者、地域の人々と関わることの大切さを痛感した。



## 「幼稚園は立っています」

早朝に激しい地震の後、余震に混乱している中、ラジオのニュースを聞きながら、幼稚園はどうかと案じていた。報道される被害状況に心を痛めた。交通機関の全面ストップ、道路は交通麻痺と身動きできない中で心の焦り。電話もパニック状態、やっと通じた保護者の一人からの「幼稚園は立っています」の声に、ひとまず安心した。五階建ての市営住宅の一、二階の幼稚園なので、もしこの住宅が倒壊していたらと不安だったからである。

三人の教職員に電話をするが通じない。それぞれ市街の激震地で被災して避難勧告を受け、しばらくは家に戻れない状態であった。

P T A 役員に電話をして通じたので、連絡網により、幼児・保護者の安否確認を依頼した。その後の電話連絡により、幼児十三名とその家族も全員無事であることを確認した。

一部通じた交通機関を乗り継いで行ける所まで行き、そこから徒歩で幼稚園に向かった。大勢のリュックを背にした人々と共に、崩壊して焼け跡になった瓦礫の街を幼稚園へ急いだ。

ようやく幼稚園にたどり着き、門を開けると、園庭に亀裂が走っていた。また、園舎の柱・壁・テラスには、大きな亀裂が入り、地震の強烈さを感じた。職員室に入ると、机・戸棚は転倒し、電話とファックスが宙吊りになっていて、送られてきた文書が山積みになって散乱していた。早速目を通し、至急しなければならぬ連絡を済ませ指示を受けた。

外で呼ぶ声があるので出てみると、地域の自治会長が来園され、近くの住宅に住む方の家が傾き、危険

なので幼稚園に避難させて欲しいと依頼された。一応避難所は小学校であるが、老人と病気の方々と、近くの幼稚園に避難したいとのことであった。すぐに入って頂くよう話すと、その方は安心され、ある婦人は私に向かつて合掌された。

プレイルームに、とりあえず十六人の場所を設定した。救援物資の配布を受けるため、区役所に届け出て認可を受け、正式避難所として発足した。しかし、水道・ガスが出ていなかったため、不自由だったが、近くの人が床下の井戸からポンプで水を汲み上げて供給して下さったので、トイレの水等は、大変助かった。暖房は電気しか使えず、電気容量が乏しく、被災住民と園の暖房器具の使用量がオーバーし、たびたびブレーカーが切れた。寒い日の暖房に困った。

幼児の家の被害は、全壊が三人、半壊が五人、その他は、何らかの被害を受け、殆どが居住できなかった。親戚が知人宅に避難している人もいた。家が全壊した勝君の四人のきょうだいは、姫路の親戚の家に避難していたが、避難所の小学校にいる両親が「今こそ、子供たちと共にこの苦難を体験し、家族でこの震災を乗り越えねば」と幼児たちを避難所に連れ戻した。他の幼児たちもそれぞれ違った場所で不自由な生活の中をよく我慢していた。家族で励まし合い助け合っていた。再び幼稚園で友達と遊べることを楽しみにがんばっていた。

二月七日、幼稚園再開の日、登園した幼児たちはお互いに手を取り合って喜んだ。その姿を見て教職員も保護者も心が明るくなった。そして、この幼稚園が、幼児の心を支え励ますよりどころであったこと、また、地域住民の方々の避難所として役立ち、幼稚園のよさを発揮できたことを、有り難く思っている。

## 惨禍の中で

あの一月十七日は、小学校建替えの工用フェンスを園庭に設置する日であった。須磨の海岸線よりある黒煙・朝日をさえぎる濃いぶきみな雲・浮遊してくる灰。徒歩で幼稚園へ向かう。途中、余震で何度も足がすくむ。南下するほど、被害は甚大だった。倒壊した家屋から、路地から、人々が私とは逆方向に無言で歩いている。消火活動はなく、燃え上がる家屋。幼稚園は…、気があせった。

運動場には、既に大勢の方が避難されていた。そのなかに、在園児の洋子の家族もいた。電気・ガス・水道すべてがストップ。電話もストップ。職員室・保育室は、惨憺たるものであった。遊戯室には、既に避難されてきた方がいて、八月末まで避難所は続いた。

「一階の保育室を開放してほしい」「余震が恐ろしくて二階には……」の思いが強く、寒い運動場でうずくまっているのを見ると、たまらなかつた。停電でシャッターが開かず、ハシゴを二階にかけ、内部より鍵を開け、保育室二教室を開放する。数日後、避難者が増え、幼稚園舎のみで一月二十八日には、百三十人余となった。教職員二名が、対応できる状況ではなく、小学校の先生と一緒に活動した。

震災当日から家庭訪問をして、まず幼児の安否を確認し、全員の生命の無事と所在を確認した。ある保護者が、倒壊した家屋の中で、家財道具を無表情に片付けていた姿が、印象に残っている。その家の近くで前年度の修了児の家族の尊い生命が失われるなど、思い出すのも辛い。以後、幼稚園再開まで継続的な家庭訪問を繰り返し、幼児を励まし続けた。絵本をリュックに入れ、家で読み聞かせたり貸し出したりした。色紙や画用紙を持って訪問したり、身近なもので作って遊べるようなプリントを配ったりした。幼児

たちは、担任の訪問を心待ちにしており、たいへん喜んでくれた。

一月末、花壇にパンジーの苗を植え、妙法寺川の水をやる。

「先生、花はいいですね。どんなに寒くても芽がでて、花が咲きますね。ここに居る間、水は私がかかりますから…楽しませてもらいます」といった避難住民の方。「先生、私もチューリップに水やってるねん」「みんなのものも、あげるねん」と洋子。幼児の手で水を運ぶのはたいへんなのに…「がんばろう！」の気持ちが伝わってくる。

みんなの協力を得て、二月十六日、幼稚園再開となった。「私の家、幼稚園やから近いで」と言った洋子の一家は、祖父母・両親・三きょうだいの七人での避難所生活であった。祖父母の家、自分の家共に全壊。父親は体調をくずしており、一家にのしかかる荷は、とてつもなく大きく途方に暮れる中であつた。洋子もその重圧を体で感じ取つてのことであろう。次第に表情が暗くなり、口を閉ざすようになった。語りかけても、うなずくだけの洋子の姿に、胸の痛む毎日であつた。その彼女が、幼稚園の再開と同時に元気を回復し、もとの陽気な明るい笑顔を見せるようになった。やはり園は幼児たちにとって、心の支えになる場所だと確信し、教育復興への力が湧いてくるのを実感した。園の再開後は、他の幼児も目を追って明るさを取り戻し、避難住民との共同生活の中で、人の絆の大切さや、困難の中で勇気を出して頑張っていく大切さなどを学んでいった。

若宮幼稚園



## 二 ようちえんいつはじまるの

### 避難所となった幼稚園

夜明けの大地震!!

東灘区住吉の住民の多くは、筆舌に尽くしがたい被害を受け、住吉幼稚園は、一月十七日より八月二十一日迄住吉地区の避難所として対応を続けることになった。幼稚園周囲の煉瓦塀は、全て倒れ、園舎は建物にひずみや亀裂が見られたが、築二十年の鉄筋だったことで何とか建っていた。しかし、建物内部は、保育室内のピアノは五台とも倒れ、職員室の重要物品保管金庫が移動し、足の踏み場もない有様であった。園舎内の一階遊戯室、保育室二部屋、教材室、管理員室に百五十人の避難の方たちが分かれて避難所として使用し、幼稚園は二階の保育室と管理棟を使用することにした。当初は、寝具や家財道具で足の踏み場もない有様だった。

保育室内の倒れたピアノもそのまま、その上が水屋代わりになり、調味料が並んでいるのを目にしたときには思わず苦笑したものだ。

園庭にはテントが張られ、救護所となり、車が数台持ち込まれていた。プール横には簡易風呂、園庭隅には簡易便所が設置され、園庭は、人が通るのがやっとという空間しかない状態だった。また、水の出なかった二週間は、プールや池の水が随分助けになった。

幼稚園の北隣の二十戸の集合住宅は全壊したが、隣接していた新しいマンション一棟は無事で、持ち主のご夫婦が避難の方たちのリーダーを進んで受けられた。食事の炊き出し、救援物資の分配、避難生活の

ルール作りを始め区役所・小学校・地域への連絡や交渉にも園長と同行して下さり、頭の下がる思いであった。

二月二十一日の保育再開に向け、園庭テントの片付け、救援物資の配布、危険防止のためのフェンス設置、風呂の使用中止、車の撤去などについて度重なる話し合いをしたが、保育を再開する状況に至る迄には問題が山積していた。その中で避難住民の方たち、ボランティアの方たちの大きな協力で、保育再開にこぎつけることができた。そして、幸いにして住吉幼稚園の幼児、保護者、教職員全員が無事であったことに感謝しながら、幼児たちと感動の対面をすることができたのである。

通園路等に危険箇所もあり不安はあったが、その一か月後の平成七年三月十八日に修了式が無事迎えられたことは、教職員一人一人の大きな努力、そしてPTA、避難住民の方たち、地域の方々のご協力のお陰と感謝の気持ちでいっぱいである。このときに培った人と人との「きずな」は生涯忘れ得ないことだろう。

平成六年度 住吉幼稚園長 川 西 雅 子



保育室を避難所に

「ようちえん、いつはじまるの?」

二月八日、J R 住吉―芦屋間が開通し、大阪方面に避難している幼児や保護者が、ポツポツと幼稚園に顔を見せるようになってきた。実際に顔を見ると、「ああ、無事だったんだ」と心からほっとした。

久しぶりに会う幼児たちは、あまり話さず、じっと顔を見て、ときおりうなずく感じだった。それでも、「幼稚園、いつ始まるの?」「幼稚園に来たい」という気持ち伝わってきた。電話では「幼稚園が始まるんだったら、ここからでも通います」と、遠方の親類宅に避難している保護者の声も寄せられた。

震災後、避難所になったため、幼児を迎える保育室も遊戯室も使えなかった。園庭には、大きな日本赤十字社のテントが二張の他、車も多数停めてあった。通路の傍のプールサイドにはドラム缶を使った仮設のお風呂が設置され、絶えず倒壊家屋の廃材を燃やしているなど、幼児が安全に生活できる環境を確保していくには、山のような課題があった。それでも、一日も早く園を再開しようと、避難されている方々の代表やボランティアの人たちと相談し、協力頂いて、漸く二月十三日に臨時登園のメドがたった。通勤ラッシュの時間帯からは少しずれているが、それでも通常の超満員状態のJ Rに乗って親子しっかり手をつないでやってくる幼児も多かった。「大変だったね」「よく来たね」と声を掛けると、思わず涙がこぼれてしまう母親もいた。



きょうの大変だったこと、震災からきょうまでの大変だったこと、これから先の不安、いろいろな思いの涙だった。幼児たちは、つないだ手から親の気持ちを感じ取り、口数は多くなかった。

大好きなウサギを抱いたり、友達と手をつないで歩いたり、保育室からなんとか出せたコマの中に自分を見付けて思わずにっこり笑ったりしながら、幼児たちは、徐々に生活のペースと落ち着きを取り戻していった。一人一人の幼児が自分の安定できる「場」を見付けようとする姿を、ひたすら見守る日々だった。

安否確認の家庭訪問をしたとき「こんなに傾いた家からよく出てこられたなあ」「よく無事だったなあ」と感じ、こんなにこわい思いをした幼児たちをどう迎えようかと迷っていた。

いよいよ、殆どの幼児が入ったこともない二階の会議室で、年少児、年長児混合の保育をすることになった。そのときの保育記録に、次のようなメモがあった。

園庭の様子が変わってしまったこともあり、登園すると、まず禽舎へ行く幼児が多かった。

禽舎に行くと、可愛がっていたウサギやアヒルのリリコを抱き、顔をくつつけて「リリコ、元気だった？」と喜んでいいる。早速自分たちで掃除を始めた。アヒルが「ガアッ」と鳴くと、顔を見合わせて「池の水がきたないからや」「換えてやらなあかん」「まだ水、出えへんのとちがう？」と話し合っている。アヒルやウサギへの親しみはもちろんであるが、前と変わっていないもの、慣れていることから始めようとする。

「先生、おはよう！」の声にびっくり

木造の温かみあふれる思い出のいっぱいだった園舎であった。台風が来るたび、屋根がとばないかと心配し、幼児たちは、雨漏りをバケツで受けるという貴重な体験をしながら遊んだ建物であった。完全に倒壊した遊戯室を見て、地震が昼間でなくて良かったと恐ろしく思った。置いてある幼児たちの持ち物だけは持ち出したいと思い、余震の続く中、運び出すことにした。一月三十一日、園舎の解体が始まった。壊れた遊戯室の中から、どうしても見付けだしたいものがあつた。保護者の方がバッチワークで作つてくださった園舎全景の額であつた。業者に取り出しを頼み、作業を見守っていると、少し汚れ、破れていたけれど取り出すことができ、皆でとびあがつて喜んだ。園舎の解体は、二日間であつというまに終了した。なんともいえないさびしさだけが残つた。

隣接の御影小学校の会議室を連絡場所として借用し、そこに職員室を置き、幼児の所在確認、家庭訪問と慌ただしく過ごす中、御影小学校の開放市民図書室が保育室として借りられるようになった。早速、保育再開に向けて準備を進めた。本棚を壁ぎわに動かし、本が落ちてこないようにロープでくくり、周りに机を置き、余震にも対応できるようにした。粘土や紙、玩具も運び、かわいい絵を貼り、床にじゅうたんを敷いた。人目にはよくわかるように御影幼稚園の旗を取り付けた。保育再開のピラを近隣に貼つた。しかし、幼児たちは来るだろうか、お母さんたちは送り迎えができるだろうかという不安があつた。

二月十三日、保育再開「先生、おはよう！」元気な大きな声で幼児たちが登園してきた。恥ずかしそうな顔、うれしそうな顔、とまどつたような顔と、次々とやってくる幼児たちに挨拶ができることがこんな

に幸せなことだと感じたことは今までになかった。お母さんたちともお互いに再会できたことを涙を流して喜びあった。

友達と出会ったことで気分が高揚し、はしゃぎ回る幼児たち。漸くぶりに保育が再開でき、幼児たちのうれしそうな顔を見ることができたことは感無量であった。

保育再開にあたり、亡くなった二人の友達のことを幼児たちに話すのは大変辛かった。幼児、保護者と共に黙禱をささげ、こんな悲しいことはもう二度とおこらないようにと願った。

借用できたのが一室だけであったので、三クラス合同で保育をした。幼稚園で飼っていた金魚やウサギも連れてきて共に遊んだ。どのような状況におかれていても、生きものの世話をしたり、かわいがったりすることは、幼児たちにとって、心のなごむ大好きなことなのだと感じた。

ボランティアの方々に入形劇、おはなしを語る会、手作りおもちゃのプレゼントなどをしていただき、楽しいひとときをもつこともできた。また、遠くの幼稚園からの励ましのお手紙を部屋中に貼って明るく過ごすことができた。

震災直後の家庭訪問の時、「ぼくの誕生会はどうなるの？」と心配していた幼児がいた。大変なときだ



全壊の御影幼稚園園舎

からこそ希望をかなえてやりたいと思ひ、保護者と共に誕生会を開いた。

避難先の遠くの住居から電車や車で通園し、週に二日しか登園できない幼児や「今日はお風呂に行くので休みます」と保育中にバスに乗って帰ってしまう幼児など、今までになかった生活ぶりがかがえた。

幼児自身が目的をもつて遊びに取り組めるように、劇遊びをすることにした。どのような劇遊びをするのか、友達同士相談をし、劇に使う物をつくったり、曲を決めたり、時間を決めて練習をしたりなど、発表会に向けて、心を一つにして取り組んだ。毎日来ることでできない幼児は、「家で練習しておくね」と楽しみにする様子も見られた。児童館を借りて、保護者の方にも参加してもらい、劇遊びの発表会とお別れ会を開いた。久しぶりの緊張した雰囲気の中で恥ずかしがったり、気持ちが高ぶりうまくいかなかったりなど、いろいろな幼児の姿が見られたが、保護者の方々に見てもらえたことは、幼児たちにとって大変うれしいことのようにであった。

#### 御影幼稚園



浜御影児童館での生活発表会

## 視覚障害児の安否確認と避難所での様子

震災直後、本校は避難所となったが、幼児・児童・生徒の多くは、スクールバスやその他の交通機関を利用して広範囲から通学しているため、本校には避難してこなかった。そこで、自転車や徒歩等で自宅へ行き、近所の方々に避難連絡先を尋ねるなどして全員の安否を確認した。

### 母親から聞いた避難先での幼児の様子

正夫君の家はマンションの四階で、ベランダの柵が破壊した。このとき、周辺の住宅は、一階が押しつぶされていたり、火事が発生していた状況だった。正夫君は、母親に手を引かれ、家族四人で近くの小学校へ避難した。正夫君は視覚からの情報を得ることができないので、避難所内のいろいろな音や声が常に耳に鳴り響くため混乱し、夜もなかなか寝付かれず、ついには耳を押さえようとするといった状態になったという。そのため、正夫君たちきょうだい二人は、祖父母の家に移り、そこでやっと精神的に安定を取り戻した。

努君の家族は、約三日間、自家用車の中で過ごした。努君一人が車に残り、家族が水を汲みに行っている時に余震が起きた。家族が車に戻った時、努君は車外に出て泣きながら家族を探し求めていた。このときお母さんは、「周りには車があったり、いろいろな物が落ちていたり、近くには海があったりしたので、思わずヒヤリとした」と無事を喜んでいた。

— 遠いなんて言ってもらえません —

東灘区にある本園は、阪神・淡路大震災で建物の外観は残ったものの、壁は至る所で崩れ、戸や窓はこわれ、蛍光灯は落ち、あらゆるものが転倒して惨憺たる有様だった。幼稚園の復旧と幼児の安否確認に奔走する日々が始まった。

震災当初、ほとんどの幼児は、近くの小・中学校、体育館、大学などに避難していたが、二三日もすると両親の実家や親戚の家に一時避難する家庭が多くなり、安否確認も困難をきわめた。幼児の自宅に行き、一時避難の連絡場所をはり紙等で調べたり、避難所巡りをしたり、一人でも無事なことを確認したかった。

園舎の傷みが激しいのと、一時避難して自宅に戻っている幼児が少ないことで、近隣の幼稚園が一緒に園生活を再開することになった。二月十五日の臨時登園に向けて、本庄・深江・本山の三園の教職員が集まり、合同で職員会をもち、話し合う。震災後の復旧で刻々と周囲の状況が変わっていく現状をふまえ、園生活の流れを短期間で捉えていくことにし、園だよりや保健だよりを一週間単位で発行していくことにした。

どれだけの幼児が通園できるか把握できないので、保育は、全教職員が二人ずつペアを組んで順番に担当することにした。園生活ができるだけ楽しいものになるよう、家庭生活の延長のような温かい雰囲気を感じられるように、園庭ではいろいろな遊具を準備し、保育室ではままごと、ブロック、製作コーナーなどの場所に可愛いじゅうたんを敷き、環境を整えた。また、みんなで和やかなひとときをもてるよう、おやつ時間も作り、可愛い紙皿や紙コップなども用意した。

このような幼児受け入れの準備をしていくとともに、幼児宅や一時避難先に電話連絡をして、臨時登園

の日程を知らせる。近隣には、職員手作りのポスターを貼り、口コミでも知らせてもらえるように配慮した。

臨時登園日、他園での保育に一抹の不安を感じていたが、元気に登園してくる幼児や保護者との再会は、不安を一掃するほどの喜びであった。場所に慣れないせいとか、初めは不安そうにしていた幼児たちも、友達が次々に登園してくるにつれ、緊張がほぐれすべり台やブランコなどで遊び始めた。幼児たちのうれしそうに遊ぶ姿を見て、保護者の方が「うちの子は地震の時のショックでもいわず笑いもなかったのに、友達と出会ってうれしそうに笑っています。地震以後はじめての笑顔です」「遠くから二時間余りかけて来ました。登園をやめようかと迷いましたが、あんなに楽しそうに友達と遊んでいる姿を見たら、遠いなんて言われません。できるだけ通園させてやりたいです」と話された。幼児たちの楽しそうな姿やこぼれる笑顔に、保護者とともに胸を熱くした日だった。

二月十七日から合同保育での園再開となった。

本庄幼稚園



親子で楽しくフォークダンス



避難所となった兵庫幼稚園

## 第二章 園再開



降園後親子でなかよく遊ぶ

# 一 また、みんなで遊ぼうね

## 阪神大震災 ―「震度百です」―

倒壊したビル、大きく傾いたビル、焼け落ちた家屋などのつづく町並みの一面に小さな植込みが見えた。そこにはサザンカが小さな花をつけ、つがいのウグイスがいた。

震災の恐怖やその後の殺伐とした日常生活で疲れきった私にも、やっと自然の営みに気付くゆとりができたのであろう。

多くの人命が失われ、物質的にも精神的にも筆舌に尽くしがたい痛手を受けた。幼児は、依存から自立へとその発達の課題を乗り越える大切な時期にありながら、母親のそばを離れられなくなったり、大小便が言えなくなったりする赤ちゃんがえりの症状を呈した。

神戸市の幼稚園では、園舎が全壊して隣の幼稚園で時間差保育をしたり、避難所に使われている中での保育であったりしながら、二月十四日には、すべての幼稚園が再開した。中には、遠隔地への避難によって、幼児数が半数以下になっている園も多くみられた。

良太は、登園後、早速「地震です。震度百です」とアナウンスする。「北神急行全線不通です。こちらは、地震研究所です。余震がきますから逃げてください」とこのアナウンスに刺激された幼児の何人かは「地震や」「タンスが落ちてきた。懐中電灯がいる」などと反応している。

子供たちは、この震災で自然の力を知った。幼児にとつて、震災の体験はさまざまであつても、これからの成長に大きな意味をもつことになるであろう。逆境にも負けず力強く生きぬく人になってもらいたい。

平成六年度 神戸幼稚園長 村上博子

## 震災直後の幼児の遊び

二月二十二日（幼稚園再開二日目）より年少児、年長児のそれぞれの遊びのエネルギーを配慮し、二組合同の保育に切り替えた。保育室は、一階のみの使用である。園周辺の環境は日毎に変化し、建物の解体がすすんでいく。幼児たちの通園路も、砂煙やほこりがいっぱい、マスクや帽子を付けて登園する姿が多くなった。

このようにあまりよくない状況の中にもかかわらず、登園する幼児が増えていった。幼児たちはそのたびに再会を喜び、徐々に元気を取り戻していくのが感じられた。

保育室の一角を積み木で囲い、その中にペットボトルをいっぱい並べている。「ここ避難所！ここで暮らしているねん」「ここに座ってください。何でもありません。お金はいりません。全部ただです」このように、救済物資や避難所での生活が、幼児たちの遊びの中に出ている。

また、この頃からぬいぐるみで遊ぶ女兒の姿が目につきました。空缶の中にぬいぐるみを入れ「お風呂に入っているの」「いい気持ちでしょう」とぬいぐるみに話しかける。水やガスの復旧が遅れ、お風呂に入れない状況の幼児が大半であったためであろう。

「先生ちょっと来て。今からこわいことが起こるよ」という幼児の後について行くと、「ガタガタッと、くまちゃんとここにタンスが落ちてきたの」と、積み木をくまの上に乗せている。「くまちゃん、血がダラッと出て死んじゃったの」と淡々と話している。

「えっ！」「ううん、でも大丈夫、病院に運びましょう。ピーポー、ピーポー」と板を担架にして、くま

を運びタオルを体中に巻き付けて手当てをし、「くまちゃん大丈夫だって」と今度はうれしそうに話す。一見リアルで残酷なように思うが、幼児たちは、単に地震の体験を遊びとして楽しんでいるだけのように見える。生活経験を再現することで、心の中にある恐怖感や不安感を伝えようとしているのではないかと思った。また、辛い経験をこのように遊びに取り入れ、けなげに生きようとしている幼児たちのたくましさに励まされ、共に乗り越えていこうという気持ちを強くもった。二月四日に一月から三月生まれの幼児たちの誕生会を合同で行った。「ぼくの誕生会ある？」と心配そうに尋ねる幼児の表情から楽しみに待っている様子がひしひしと伝わってきた。

私たち教師は、少しでも幼児たちの心が和み、思い出に残る誕生会になればと人形劇を披露した。ともに踊り、歌いながら楽しいひとときを過ごした。三月八日幼児たちも随分落ち着き、余震も少なくなつたので、各クラスそれぞれの保育室に戻る。殺風景だった保育室に、全国の小学校、幼稚園からの激励の手紙や、絵画、製作物などを掲示し、一緒に見ながら楽しく会話が弾んだ。「お返事書く」と花一ぱいの手紙を書き送った。このころから弁当も開始する。ガスがまだ復旧していない状態の中であり、おにぎりと炒め物少々という質素なものが多かった。しかし、幼児たちは久しぶりに友達と一緒に食べる食事に喜び、お母さんの手作りの温かさをかみしめているように見えた。また、遠方に避難しているため、登園できない幼児たちには、手紙や、電話、週一回発行する園だよりの送付などで、園とのつながりを図ることに努めた。

神戸幼稚園

## あの日より二か月、忘れ得ぬ日々

五時四十六分、六時起床の私は、残り少ない眠りをむさぼっていた。その時、激しい揺れに飛び起きた。何が何だかわからない、地震だとわかったのはしばらくしてから……。こうして兵庫県南部地震の第一日目が明けたのである。

幼稚園は、園舎は無事であったものの、園庭には亀裂が入り、園舎を取りかこむ塀という塀は全部外側に倒れていた。特に西側は高い石垣であっただけに、これが保育時間帯であったなら、何人の幼児が犠牲になっていただろうか。西側の塀を利用して作られていた禽舎は、外観は残っているものの、一面は塀と共に落下。小鳥は飛び出しただろうが、ウサギは多数犠牲になったもの、又園庭を走りまわっているものなどさまざま。二ワトリとアヒルが神妙に禽舎の中にいたのが印象的であった。園舎内はどこも落下物で散乱、足のふみ場もない。職員室内の耐火金庫が、ある職員の机を直撃。朝礼時であったら、と身も凍る思いであった。

二十一日、連絡がつかなかった教職員も無事が判明、本日より全員が集まる。職員会議で、幼児の安否確認、休園措置、通勤手段、保育再開等について検討する。住宅局営繕課より破損箇所点検、立ち入り禁止箇所のロープ張りが行われた。教職員作業で道路落下のガレキの片付けをする。そうしている間にも余震が続く、有感百回。

二十三日、園舎内の片付けにかかる。避難所にいる幼児の状況の把握、各幼児宅に当分の間、休園の通知を各担任より連絡する。幼児、保護者共全員無事の確認がとれ、教職員一同安堵する。

二十六日、教育委員会より園舎点検に来られ、園舎自体は危険なしとのこと。ホッと一安心、耐火金庫

は機械を待ち込みつり上げて起こす、床板がはがれ大きな穴があいていた。今更の如く揺れの激しさに驚く。この日より近隣の小学校へ電話番号の手伝いに教職員が交代で出向く。園庭の亀裂と外壁の倒壊で、このままでは保育ができないので、教育委員会に相談し、これからの保育再開について話し合う。

当園では、幸いにして最初から水道が使えた。隣接した真生塾は止まっていた（乳幼児も多く収容している施設なので何よりも水が必要）ので、ホースで終日給水する。近隣の人々も伝え聞いて集まり、一日中、手洗いは賑わい、情報の交換等ちよつとした社交の場でもあった。

二月四日、園庭の整備が始まる。幼児たちの愛用していた遊具、禽舎がショベルカーで取り壊されていく、春には美しい花を咲かせた桜、秋には沢山の実をつけた柿の木が伐採されていく……、その一つ一つに思い出がよみがえり、胸の痛む思いであった。保育は、十五日より清風児童館を借りて再開されることになり、その旨のポスター貼りや児童館の準備に忙殺される。

十五日、児童館にて保育再開、五十名出席、避難所より登園する幼児も多数あり、久しぶりの再会に元氣いっぱい、短い時間ではあったが、楽しいひとときを過ごす。

十七日、県知事より正午に黙禱の通達があり、児童館で五十一名の幼児が黙禱を捧げる。

二十日、本日より本園にて保育再開、正門は危険なので通用門から登園、一階の保育室は閉鎖し、二階の遊戯室及び保育室を使用する。この間、各地よりお見舞や激励の手紙、電話、訪問（人形劇等）、救済物資をいただく。皆様の温かい支援に感謝し幼児も返事を書いたり絵を送ったりする。福岡市在住の大学生（卒業後は神戸でケーキ製造の会社に就職を希望している青年）が、自分で焼いたというケーキをバイクで運んでくださる。味もさることながら、この優しさ温かさに感激する。

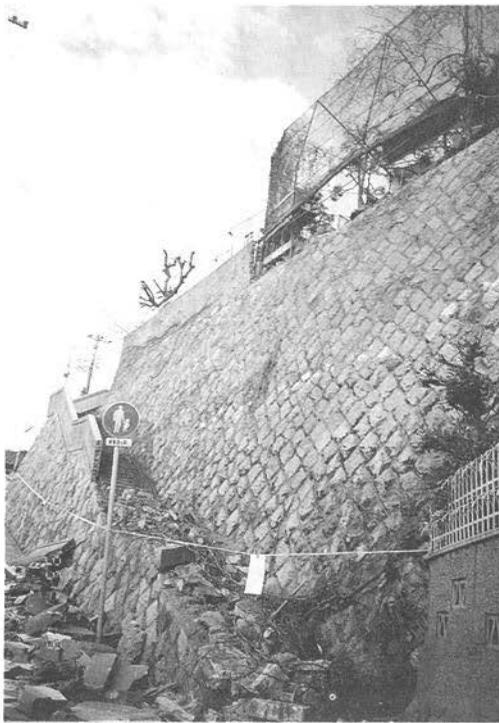
三月四日、従来、行っていた生活発表会を、本年は「小さな発表会」として各組が発表する。練習時間もなく幼児も全員ではないが、何か一つの幼稚園生活の思い出を作ってやりたい。両親の参加も多く拍手の応援を得て大活躍、久々に幼児のパワー全開で明るい雰囲気うちに終了した。

十八日、修了式を迎える。年少児を含めて八十二名が出席、この日のために疎開地より馳せ参じた者もあり、被災混乱の中にも落ち着いた式を行うことができた。修了後は、神戸を離れ遠くの地に移り住む幼児もあって、別れ行く淋しさをかみしめながら幸せを願う。しかし、ほとんどの家庭が神戸に帰って来られる由、これからの復興に力強いものを感じた。

この日にいたるまで、毎日が闘いであった。教職員や保護者、地域の人々が一つになつて復興に努力した日々を忘れることはできない。今はもう遠い思い出となりつつあるが、園庭が修復され、幼児の明るい笑顔、歓声が戻ってきたときこそ私たちの仕事は終わったと言えよう。

平成六年度 清風幼稚園長

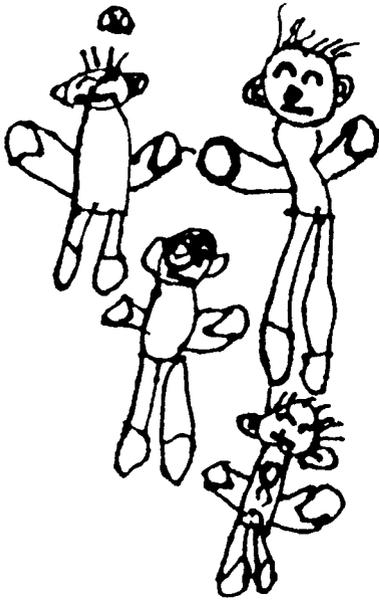
新井 欣子



## 「砂場で遊びたいね」

二月十三日、震災後はじめて児童館に集合する。六十パーセントの親子が元気に集まった。幼児は、児童館の遊戯室で今まで力を持って余していたかのように、床をすべったり走りまわったりして賑やかだった。次の日から児童館での遊びが始まった。年長児と年少児が大小二つの部屋をかわり合って遊んだ。久しぶりに友達と会って遊ぶことが楽しく、積み木やブロックでごっこ遊びが始まった。少しの遊具を取り合えることもなく、仲良く使っていた。遊戯室では、思いつきり体を動かして遊んだ。大好きなアンパンマン体操をしたり、ネコとネズミのゲーム遊びをしたり、ジャンボかるたを楽しんだりした。絵本や紙芝居もした。幼稚園が再開できるまで安全な児童館を使用できたことは、幼児にとっても教職員にとっても安心できることであった。

幼稚園での保育再開は二月二十日であった。震災から一か月余り、不十分ながらも幼稚園で保育できることは感無量であった。正門玄関や一階の保育室が使用できないため、登降園は西門を使うことになったので、靴箱の移動、シールの張り替えをした。登園は、ほとんどの幼児がとまどっていた。黄色い「安全第一」のフェンスが張りめぐらされ、入口も



靴箱も保育室もすっかり環境が変わってしまったからだ。何よりも園庭を使えないことがショックだった。

二階から「砂場で遊びたいね」と友達と眺めていた幼児の姿が印象的だった。園庭にも一階にも行けないため、遊戯室を開放してのびのびと遊べるようにした。

年少児・年長児の各二組が合同で保育することになったが、半分以上が避難しているので、手狭な感じはなかった。また、チック症状がひどくなったり、母子分離ができなくて泣いたり、類尿になったりする幼児の姿も見られた。そこで、どの子にもスキンシップをはかりながら、様々な気持ちを受け止めていくように、教職員全体で話し合い、配慮した。

二月二十五日、一月と二月の合同の誕生会をした。

情緒的に落ち着かない幼児や、じっとできない幼児が目立った。また、遠方に避難している幼児たちは、帰神のめどさえたっていない状態であり、とても寂しい誕生会だった。

清風幼稚園



園庭の整備がはじまったよ

将来の建築に役立つことを願って——全国各地の建築家とのお便り交流——

園再開後の二月下旬頃、元楠幼稚園PTA会長の建築家より、日本の将来の建築に役立てるため、是非、日本建築士会連合会（まちづくり委員会）全国大会の会場に、幼児・児童の震災体験の絵はがき展示に協力を、との依頼があった。心のケアとして、震災体験の絵を描くことが賛否両論の問題を投げ掛けていた時期でもあったので、「何故、子供の絵が必要なのか」趣旨の真意を問い、園の実情等さまざまに考慮した上で実施した。一か月後、全国各地の建築家及びご家族から、子供たち各家庭に励ましのお便りをいただくと同時に、大会参加者の絵はがき売上金を義援金として、阪神間の協力校園にいただいた。あれから真摯に現在に至るまで検討委員会を重ね、ようやく今、連合会の組織がまとまり、建築及び資金等の支援活動の具体化の見通しがつき、行政も動き始めたとのことである。

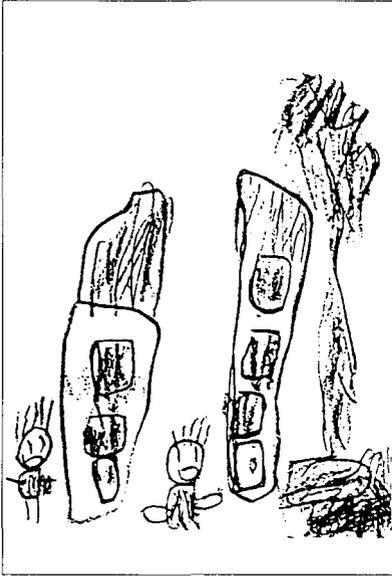
平成六年度 楠幼稚園長 松野 淑子



ぼくの家が全壊になり、屋根のカワラも全部落ちてしまったの



解体工事のおじさんが家をつぶしていたよ



ビルがたくさん解体されていく



家がたくさんもえたの 消防車もたくさんきたよ



火の中を みんなバジャマのまま一生懸命逃げた こわかった



園長先生・吉村先生・岩田先生・萩原さん

お元気ですか。お手紙どうもありがとうございました。

慎一は、とても元気で、毎日外に出て、田んぼや畑の中を走ってます。

竹やぶの中も探検して、大きな竹を持って帰ってきてお母さんに叱られました。

お寺（近くの山寺）に行ったとき、昔のお金も見つけました。

お友達と遊べないのが寂しいです。でも、お隣のおばあちゃんとお話したり、畑にいたおばちゃんとお話したり、遊びを見つけてるのがじょうずな慎一なので次々と遊びを見つけては走り回っています。

この間、雪が三センチメートルくらいもつたので、小さな雪だるまと、雪うさぎをつくりました。雪が降りだすとジャケットも着ないで、外に飛び出して、びちよびちよになって、帰ってきたりと、近所のおばちゃんも、『元気になってよかったネ』と、声をかけてくれます。ばらぐみのお友達から、お手紙をもらって飛び上がって喜んでいました。

そして、皆にお手紙を書くのといって一生懸命書きました。

慎一が、どうしても幼稚園へ行きたいと言うので、三月五日に神戸へ帰ります。

三月六日（月）幼稚園に行きますので、皆さん、また一緒に遊んでくださいネ。会える日を楽しみにしています。

さようなら



御崎幼稚園

「やっと水が出たよ」

「先生、わたしの家、親戚の人がいっぱい来てるねん。おじいちゃんやおじちゃんやいとこ、全部で十三人もいるねん」「団地のコップが傾いてしまつてんよ」「健ちゃんの棟、真つ二つに割れてしまつてん。健ちゃん、風邪引いてるねんで、かわいそうやな」「良君や智君は、田舎に行つたんやて」「そうや、疎開してるねんで、お母さん言うてたわ」「明君も、余震が無くなってガスが出たら帰つて来るらしいよ」「わたしとこのおばあちゃん、仮設に入ってるねん」「水もガスも全然出えへんわ」「ペットボトルで水もらいに行つたよ」「わたしも行つた」「今度の土曜日、健康ランドへお風呂入りに行くねん」「わたし、きのうお風呂に入った」…。

二月六日に、園が再開した。再開といっても大半の幼児たちは親類や知人宅に身を寄せており、クラスの三分の一の僅か三人の登園にし過ぎなかった。私は幼児たちの元気な姿に接した途端、喜びを押さえ切れず一人一人を抱きしめ無事を確認した。幼児たちは、登園するなり、自分の震災当日の様子や様々な体験などを一気に話し出した。幼児の口から今まで使ったことのない「仮設」「疎開」「余震」などの言葉が当たり前のように出てくるのには驚きを覚えた。また、幼児たちが、話に夢中になればなるほど、一人一人の不安定な気持ちや様子





「ピョンちゃん、元気をだしてね」

保育再開は、二月十三日。親類縁者を頼って避難している幼児が多く、登園できた幼児は、二十七名中十六名だった。禽舎には、幼児たちの大好きな、ウサギのピョンちゃんと、その子供たちがいるはずだった。

ところが……。大地震の後、子ウサギたちは次々と死んでしまい、幼児たちが再会できたのはピョンちゃんだけだった。

「ピョンちゃん、さみしそうや」

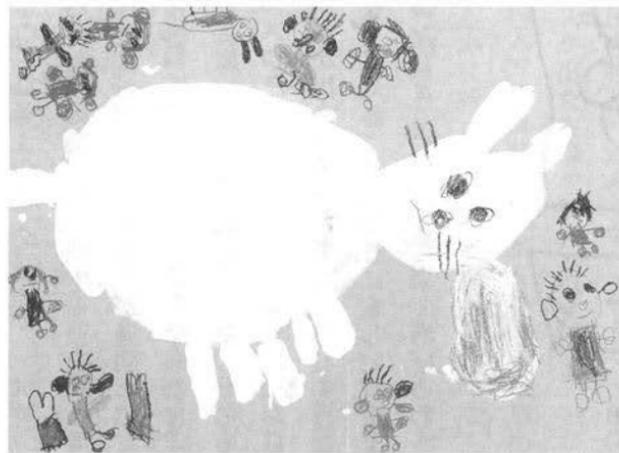
「元氣ないよ」

「抱っこしたら、じっとしてた」

「ぶるぶるしてたよ」

「ひとりになって、かわいそうや」

と、幼児たちは、ピョンちゃんの気持ちになって、接していた。子ウサギたちの死は幼稚園再開の前だったので、幼児たちは、死と直面していない。しかし、自分たちが地震に遭った時に感じた恐怖を、大好きなウサギを通して、再び心を痛めたのであろう、「ピョンちゃんと、遊ぼう」と、幼児なりにピョンちゃんをなぐさめようとしていた。



あづま幼稚園

「お湯足りてますか」

幼児の生活が地震から大きく変わった。登園してくると、幼稚園の手洗い場におじさんがいて、歯磨きや掃除をしている姿をみる。避難者の方々が「おはよう、今日は寒いね」などと声をかけてくださる。初めは、恥ずかしそうに小さな声で話していたのが、日毎にすっかりと応えるようになった。

ある日、一人の幼児が、「昨日お風呂屋さんで、おじさんと出会ったよ、うれしそうに話してくれた。おじさんが、ほくを見て笑っていたよ。今日も会えるかな」とニコニコしている。少しづつ避難者の方々とのつながりもできてきた。幼児たちの歌声が聞こえれば「上手だね」とほめて下さり、色紙のお雛さまを作って壁面に飾ると「かわいいね」といわれ、幼児たちは大喜びをした。

避難者の方々のお湯を一日に三回職員室で沸かし、「お湯足りてますか？」と尋ねに回っていると、自分の子供が幼稚園に通っていたときのことや今後のことなどいろいろな話が出てくる。その中で、ある大講師の奥さんが「先生、子供たちの修了式がもうすぐですね。小学校に行くことを楽しみにしているでしょうね」と話しかけてこられた。

「実は修了式をどんな形にしようか相談しているところなのです」と話すと、数日後、避難所となつてある遊戯室を開けようということになったと連絡が入った。避難者の方々と相談して、人数も少なくなつたし、幼児たちのことも考えて決めたとのことだった。それまでにいろいろとあつたらうと思われたが、幼児たちのためにと決めていただいたことを園として喜んで受け入れさせてもらった。

## みんな一緒！（地震の避難訓練）

一月二十六日、震災後初めての臨時登園日、十日ぶりに登園してきた幼児や保護者と共に、互いの無事を喜び合い、出会えた喜びと安堵感を味わった。それと同時に、今後の地震に対する言い表せない不安や動揺が強く感じられた。

「開園にあたって」の手紙を配布し、遊戯室で親子全員で集会をもった。最初に無事であったことを喜び、亡くなられた方々への黙禱をささげた。次に、園長より、幼児の命を守るための幼稚園としての取り組みを話した。さらに、避難時の対応策について、家庭との連絡方法などを、保護者と共に確認し合った。

園を再開するにあたり、教職員間では、特に、次の三点について共通理解した。

### ① 保育室内の安全確保を徹底する

落下物の再点検を行う。窓や扉のガラスの付近、棚の下など、危険な場所は避けて、常時、園児の椅子や園児机を並べ、地震があった時に頭や身体を隠せる場所を確保できるようにする。

### ② 保育室から園庭への二次避難の方法を周知する

地割れや建物崩れの被害がない、一番安全な場所である園庭の中央部分に集合する。フェンスや大木、建物の倒壊時にも、中央部までは達しないはずである。目印として各組の色旗を常時立てておくことにする。

### ③ 幼児の心の安定をはかる

幼稚園での災害時には、教師が、なんとしてでも守る。「何があっても一緒だよ。一人じゃない、先生も友達もみんな一緒だからね」と語りかけ、幼児たちの心を安定させる。「大丈夫」という気持ちを持たせるようにする。

初めての避難訓練では、幼児たちは真剣な面持ちであった。身体をできるだけ小さくし、机や椅子の下に入ろうとしていた。入りきれない友達の身体を引き寄せたり、「○○ちゃん早く、こっち！」と呼び合ったりしていた。「園庭に避難しましょう」のアナウンスで、今度は、組旗めざして大急ぎで集まるようにした。あらためて無事であったことを喜び、避難時の約束ごとを幼児自身がどのように理解して対処すべきかを指導した。

今後は、園庭で自由に遊んでいるとき、二階遊戯室で集会をしているときなど様々な場を想定して、地震の避難訓練を計画・実施していかななくてはならない。

毎日楽しい遊びの中に、このような避難訓練を入れることで、自分の「いのち」を守る安全な場所を知ることができていく。

東落合幼稚園



## 二 負けるな がんばれ

### 震災後から再開を願って

未曾有の大震災となった阪神・淡路大震災。深江幼稚園は、激震地ではあったが、幸い改築後一年の新しい園舎であったので、大きな破損もなく無事だった。保育室から遊戯室への渡り廊下に亀裂が入り、各保育室は備え付け整理戸棚の中の物が落下し、教具室の戸棚類が折り重なって倒れ、中の物が散乱していた。また、職員室に置いていた一トン近い重要物品保管庫が園長机の上に倒れ、机の脚が折れていた。倒れることなど考えられない保管庫が倒れていたのを見ると、地震がいかにすさまじかったかがうかがわれる。遊戯室には、指定避難所の各小中学校がいっぱいで入れなかった人や、ガス爆発の恐れの新リースを聞いた人が数名避難しておられた。

一月下旬に仮設トイレを設置してもらい、二月十四日から、園で水が出る二十四日までの十一日間は、電力総連の方が大阪から毎日、給水に来てくださった。東灘小学校まで毎日水汲みに足を運んでいた私たちにあって、非常にうれしく、人の心の温かさを身に染みて感じた。園舎が無事であったので、園再開までの、二月九日から二月二十一日までは、青陽東養護学校の深江分教室として十数名の中高等部生徒に、保育室や園庭を提供した。十七日、園再開後は、園庭で遊ぶ幼児と、教師に付き添われた養護学校の生徒と一緒に過ごし、また、避難所になっていた東灘小学校には、二月七日から三月三日まで、低・中・高学年と三部制で、一日三百五十名以上の児童に、午後から保育室を提供した。小学生は会議机で熱心に勉強



震災後一か月がたち、自宅にもどって来た保護者は、散乱状態だった家の片付けをし、毎日瓦礫の中を水汲みや送り迎えをし、大変な毎日だったと思うが、震災後のつらい時期だからこそ、友達や先生に会わせてやりたいという保護者の熱い思いを感じた。また、瓦礫の中で、公園は、テント生活をする人や自衛隊の駐屯地などになり、子供たちが安全に友達と思おう存分に遊ぶ場所は、幼稚園しかなかったと思う。そこで修了までの毎日、降園前の十分間を、園庭で親子で身体を動かして楽しめるようにプログラムを組んだ。園再開をした頃の不安定でおどおどしたり、無表情で緊張感があったりする幼児の表情が、登園し友達や先生と触れ合い、また親子遊びで親と存分に身体を動かし気持ちを開放する中で、笑顔がもどり、歓声が聞かれ、親子の気持ちの立てなおしに役立った。また、他園の友達や保護者と触れ合うきっかけになったと思う。幼稚園が親子の精神的なやすらぎを得る場となっていた。

○一年間のしめくりとしての生活の発表会「楽しい遊びの会」——こんなに大きくなりました——

どのような会にするか職員で話し合い、一人一人の幼児や集団の育ちを保護者と分かち合い、確認し合える会にしようとした。十二月から幼児に読んでいた童話をペープサートにして見てもらうクラス、ミュージックベルの演奏や同じ曲での律動、手作り楽器での演奏と歌のクラス、お正月の遊びのこままわしを披露するクラス、童話の中での遊びをするクラスと、それぞれのクラスの興味と教師の願いや出席人数などを考え合わせて、遊びを保護者に見てもらった。再開してから当日まで、正味二週間ぐらいでできることで、震災後暗い表情だった幼児が園の再開とともに以前の生き生きした様子を取りもどしていることも見てもらえるようにと、自分たちの今置かれている状態を最大限に生かして、取り組みをした。震災



## 二園合同保育での工夫

震災三か月後、街も復興に向けて解体工事や道路舗装工事が行われていた平成七年四月、深江幼稚園は大震災で園舎が使用できなくなった近隣の本庄幼稚園と、二園合同で保育することになった。同じ施設の中で、各々歴史のある二つの幼稚園が一緒に生活するにあたって、運営上いろいろな課題があったが、まず、幼児や保護者が、互いによい仲間作りをしていくことを第一に考えていくことにした。深江幼稚園三十六名（二クラス）本庄幼稚園三十三名（一クラス）で、二園が一緒に入園式を行い、園生活をスタートした。

入園当初は、「いちよう組は本庄幼稚園、ばら組とゆり組は深江幼稚園」と、幼児に言っている保護者もいた。幼稚園の枠、クラスの枠を越えて遊ぶには、教職員間の連携を密にし、幼児と一緒に遊べるような環境作りを工夫することだと話し合った。近隣の公園や広場には、仮設住宅が建ち並び、幼児にとって、幼稚園が、唯一友達や自然とふれ合って遊べる安全な場であった。そこで、動植物に直接ふれられる環境、また、身体を存分に動かして遊べる環境を考え、取り組んだ。

まず、園舎の周辺を見直し、竹藪、裏庭等を整備したところ、友達を誘い合って自由に出入りして遊び始め、小虫や草花を見たり、見付けたり、発見したことを友達に知らせたりする幼児が増えてきた。五月には、竹やぶでタケノコを発見。タケノコ探しに興じながら、二園の友達とかかわって遊ぶ喜びを味わい始めてきた。六月には、幼児と一緒に畑を耕し、サツマイモの苗植えをした。土の中から出てくる幼虫に興味をもつ幼児。成長を楽しむ幼児。収穫を願う幼児などいろいろであった。秋の頃には、「おいもパー

「ティーをしよう」と二園の幼児が一緒に準備をしたり、アイディアを出し合い、テラスや藤棚などに飾り付けをしたりして、おいもパーティーを楽しんでいた。

二学期の運動会には、幼稚園、クラスの枠を越えて、自分たちでチームを作り、障害物競争、サッカー、帽子とりなどの運動遊びに取り組む姿も見られるようになった。こうして、友達と一緒に遊びを考えたり、工夫したり、応援したりしながら、グループ遊びも活発になった。

他にも、なかよし遊びや、毎月の誕生会や園外保育の行事など、様々な共通体験を共にしていく中で園やクラスの枠がなくなり、イメージを共有し、一園より二園の多くの友達がいることで、感動もひとときわ大きく楽しさが増してきた。

保護者も、幼児が「いちよう組も、ばら組も、ゆり組もみんな友達」と、話す言葉を聞き、「私たちも二園と一緒に生活する今の状況をプラスに考えて、できるだけたくさんの方達を作りたいですね。子供に教えられました」と、一学期には別々に行っていたPTA活動、サークル活動を、二学期より二園合同で行うようになった。「友達がたくさんできてうれしいです」と、保護者同士の仲間作りも積極的になってきた。

修了式は、二園一緒にし、幼児たちは、互いにそれぞれの幼稚園の園歌を聞き修了していった。一年間二園が合同で保育をしたということは、幼児も保護者も教職員も、倍の力を発揮し得るものが非常に多かった。二園合同での保育の期間を経て、平成八年度には、近隣の本山幼稚園と三園が統合し、東灘のぞみ幼稚園として新しく生まれ変わったのである。

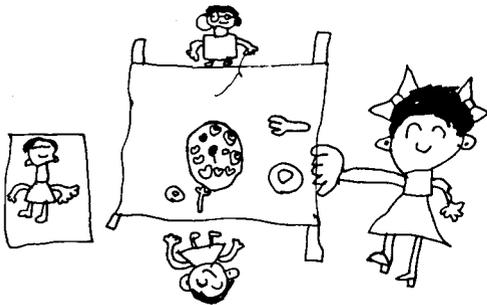
## 震災後の三園合同保育に向けて

本庄幼稚園は、神戸市の東の端に位置し、震災の激震地にあった。園舎の壁や蛍光灯は落下し、半壊状態で使用不能となった。しかし、保育を再開するためには、施設・設備の補修をしなければならなかった。教育委員会に依頼したり、教職員で補修にあたったりした。また、幼児の安否確認も行った。すると大半の在園児が疎開しており、自宅に居る幼児は一割程度であった。そこで、本庄・深江・本山の三園で合同保育をすることになった。合同保育をするにあたり、次のような手順で作業を進めた。

### 一、園長連絡会を開く

園舎の使用ができなくなった二園は隣接する園で、三園合同による保育を再開するにあたり、三園の園長が集まり、保育再開にむけて話し合い、共通理解をはかった。

- ① 臨時登園、再開日について（臨時登園は二日程度とし、その間に亡くなった幼児の追悼・お別れ式をする）
- ② 配布文書の検討
- ③ 保育時間および保育内容の検討
- ④ 対面式についての計画
- ⑤ 保育室の割り振り



## ⑥ 臨時登園の諸準備について

(各家庭への連絡、掲示ビラの作成など)

### 二、保護者会の開催

二月十五日、保護者会を開催し、三園合同保育をするに至った。経緯および通園路、通園方法、保育時間などについて説明する。

### 三、臨時登園

二月十五日・十六日の二日間を臨時登園とし、出席状況、登園の様子などを把握する。保育時間は、九時三十分から十一時とする。出席在園児は四割程度で、県外の疎開先からの通園もあった。精神的に不安定な幼児の保護者には、園内で待機してもらうなどの処置をとった。

### 四、一か月ぶりの保育再開

二月十七日から保育を再開し、保育時間は九時三十分から十一時三十分の二時間程度とする。通園に時間を要する一園は、保護者の負担を考慮して、教師と保護者一名で引率した。保育室は、一園で一室を使用した。三園合同の保育もし、交流を図った。断水のため、トイレの水はボランティアの協力を得て運んでもらった。

情緒不安定な幼児も多いので、おやつ時間を設けるなど、家庭的な雰囲気づくりに努めた。降園前には、親子ともに心なごむひとときが過ぎるよう「親子遊び」を実施した。午後は、近隣の幼児や小学生に園庭を開放した。



平成六年度 本庄幼稚園長 増田桂子

## 小さなつぶやきから

せんせい このはしらにあたってもええ？

わたしとこのはしら あたったらあかんねん

おれてるねん

(わたしあなたそしてみんな―震災 人間を学ぶ―より)



二月十三日、ようやく幼稚園が再開され、久しぶりに出会った四歳児が、うれしそうに職員室前の柱を叩いたり蹴ったりしながら、こうつぶやいた。

この柱は、管理棟を支えている柱で、二人の幼児が手をつなぐと、抱きかかえられるくらい太いものである。震災のとき、園庭が地割れし、創設者の頌徳碑が倒れたにもかかわらず、園舎がびくともしなかったのは、この柱のおかげかもしれない。文部省の現地調査官も、その強さに感心していた。

自宅二階の柱が折れているが、なんとか住めそうなので、家族四人揃って暮らしている。柱に当たったり、触ったりしてはいけないと、両親が、固く注意しているとのことであった。

震災前は、きつと兄たちや友達と一緒に家の中を走り回っていたことだろう。それが、時折襲ってくる余震におびえ、身も心も縮まるような思いで暮しているのかと思うと、せめて、幼稚園の中では思い切りのびのびと遊ばせてやりたいと思った。同時に、幼稚園の太い柱をみて、ほっとした幼児の気持ちを想像したとき、あらためて幼稚園が再開されたことに深い喜びを覚えた。

あのな　じしんのとき　ほかのかおに　すなおちてきてん

タンスもたおれてきた　おとうさんとおかあさんがでとめてくれてん

おねえちゃんとおかあさんのふとんのなかに　はいっときいうてん

いえたおれて　となりのいえもたおれて　みんなたおれてん

いえたてなおすねん　おとうさんもおかあさんもはたらいっている　おかねようけいるねんて

(人権作文集二四二五集—こんなことじゃ　負けへんで—より)

震災から一年がたつて、四歳児がつぶやいた。

震災後、一度は親類を頼って四国へ渡ったが、六甲アイランドの仮設住宅が当たったので、神戸に戻ってきた。

積み木で三階建ての家を作るのが、この幼児の決まった遊びであり、それは二度と倒れない家が欲しいという願いのものであった。

震災当時のことを自分から語ることはなかったのに、一年を経て、やっと自分から話した生々しい内容に、さぞかし恐かっただろうといとおしく思い、想像を越える恐ろしさに深く傷ついた心が一日も早く癒えるようにと願った。

「いえ、たてなおすねん」と言った言葉に、幼児なりに、がんばろうとする力強さを感じ、「負けるな、がんばれ」と心のなかで思わずエールを送った。

### 三 二階が一階になつてもてん

#### 震災時のポートアイランドと、一時入園した他園児との交流

科学技術の粋を結集してつくられた人工の島、新しい神戸の顔とも言えるポートアイランドも、大地をゆるがせた自然の力には抗しきれなかった。整備された街の道路は、液状化現象で泥にまみれ、ポートライナーは、無残な姿を呈し、唯一市街地と島をつなぐ神戸大橋も大打撃を受け、港島は、文字通りの孤島と化した。

そうした中で、ポートアイに住居する学校関係者や、地域の人々と混線する電話に苛立ちながら何とか連絡が取れたのは二日後であった。幼児や園舎の無事を確認することができ、ほっとする。私が幼稚園に行けたのは、震災から三日目であった。明石市バス、地下鉄（板宿まで運行）を乗り継ぎ、須磨、長田、兵庫、中央と四区を歩いてメリケンパークへ、そして、その日から一日数便運行をはじめた連絡船で港島の北公園へ。四時間四十分をかけてようやく幼稚園にたどり着いた。

幸いなことに、園舎の被害は、想像していたより軽く、テラスの天井等に傷みが認められた程度であった。職員室の書類戸棚が、一つ倒れていた。園内の点検を続ける。そこへ、バイクの音が聞こえてみると、一昨年まで本園に勤務していた男性教諭の田中先生だった。この日から、神戸大橋は、バイク・自転車の通行が可能になったので、岩岡幼稚園から食料やお茶のボトルを持ってかけつけてくれたのである。倒れた書類戸棚は元通りに納まった。田中先生や岩岡幼稚園の園長先生の気持ちがどれ程身に沁みただことか。翌日から、船で、自転車、他の教職員も、二・三時間かけて出勤。事前に幼児の安否は確かめたものの、それぞれのクラスの幼児について、疎開先の確認を行う。

日が経つにつれ、液状化した道路の泥が乾燥し、粉塵が舞って、港島は、マスクなしでは生活も通勤もできないありさまであった。震災から一週間後小・中学校と連絡をとり、保育・授業再開に向けて試行的に登園日を設ける。マスクで顔を覆った幼児たちが三十名登園してきた。総園児数百二十名の四分の一である。

元気に登園してきた幼児たちとの再会は、互いの無事を喜び合うとともに、地域での暮らしの様子や他の幼児の消息も同時に伝わり、保育というよりは、保護者を含めて情報交換日となった。

このようにして、被害の大きかった中央区の中で最も早い一月三十日から保育を再開、幼児の数は二月に入つて除々に増えて行つたが、二月半ばでやっと半数の六十名であった。高層住宅のゆれは想像以上に大きく、その後も続く余震を恐れて、大部分の住民は知人を頼って、ポアアイを一時出て行っていたのである。

しかし、幼稚園にも、小・中学校にも子供たちの声が響き、耐寒マラソンの音楽が園庭に流れると道行く人々も足を止めて元気に走る幼児たちの様子に見入っている姿も見られた。

保育を再開して五日目のこと、私立幼稚園に通園していた幼児の保護者数人が来訪、一時入園をさせて欲しいとのことであった。通園バスの運行がないために、幼児たちは、幼稚園に行けないのである。ライフラインも回復していない不自由な生活の中で、せめて幼児たちに短い時間でも園生活を取り戻してやりたいという親の気持ち、痛いほどに伝わってくる。

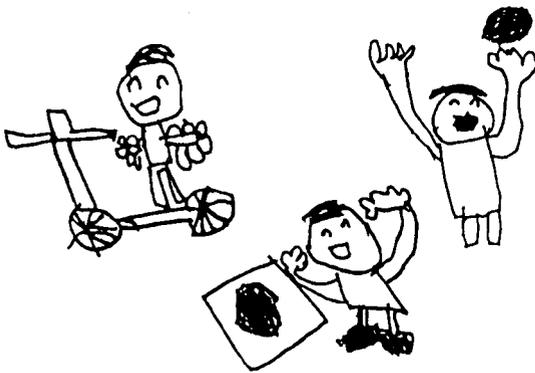
早速、翌日から三名の幼児たちが仲間入りした。すでに近所の顔見知りですぐに遊び始める。その後、毎日のように一時入園者は増えていき、最大受け入れ時には、二十数名に達した。灘区、中央区のそれぞれの幼稚園に本園から、一時入園させている旨連絡をする。

幼児たちは、自分の通っていた幼稚園の遊具のこと、遠足のことなども話し合ったり、マラソンや体操で思いきり体を動かして楽しく遊んだ。

十二月から計画していた生活発表会をどうするかが、保育再開後の課題であった。例年のような形でもつことはできない。二月も下旬になると、幼児たちも八十数名が戻ってきており、修了を前にクラスの心が目的（課題）に向かって一つになるような経験を」との思いがあったのと、こんな年であるからこそ震災を乗り越えた幼児たちの活力あふれる姿を、保護者とともに喜びたいという思いから、それぞれのクラスでできることを発表することになった。「ピーターパンごっこ」の遊びの一部を演じたり、創意工夫をこらして制作したコスチュームで歌ったり、幼稚園の行事を絵画表現して発表したり、飼育しているウサギと遊んだことを表現したり、一時入園の幼児たちも遊びの中から一番気に入ったアンパンマンの遊びを演じたり……、さまざまな発表会ではあったが、それぞれに満足感を味わうことができた。

三月、修了式も近付き、一時入園の幼児たちも、それぞれの幼稚園に帰っていく日、名残りを惜しむ幼児たちの様子に涙する保護者の姿もあった。やがて四月、港島小学校に入学した子供から、一時入園で交流した他園の友達と、またいっしょのクラスになったという喜びの手紙が届いた。

平成六年度 港島幼稚園長 宗実睦子



## 被災地の幼児を受け入れて学んだこと

昭夫は、淡路の北淡町で被災し、父親の仕事の都合で六甲の山荘に引っ越してくる。

昭夫は、四歳で両親も本園に入園を希望していたが、事情により、保育所に通うことになり、翌年四月、五歳になってから入園してくる。四月当初、昭夫は、幼稚園にもすぐ慣れ、明るく活発に遊んでいた。しかし、プリントで連絡してあることが、保護者に伝わっていないことが多かった。

不思議に思っていたところ、母親が外国籍で、日本語が話せても、あまり読めないことが分かった。

母親は、淡路では周囲の支えがあり、落ち着いて生活していたが、頼る人のいない六甲山では、まだ、昭夫の下に赤ちゃんもいて、なんとなく精神状態も十分安定していなかった。そのうえ、淡路では、家の前に保育所があり、昭夫を入所させ、保母さんたちとも家族ぐるみの付き合いをしていたということであった。

担任した当初は、甘えん坊で、おんぶや抱っこをせがむ昭夫であったが、元気で明るい子、被災してきだが、精神的にも問題はない子と安易な考え方をしていた。また、日本人である父親が、幼稚園の送り迎え、行事など積極的に参加し、クラスのムードメーカー的存在であることに安心していたが、ある時、「いろいろありますよ」と、つぶやかれたときに、表面的なことだけを捉え、心の中も同じであると判断してはいけないことに気付かされた。幼児の現状には、背景があることを認識し、いつも一人一人の育ちに思いをめぐらすことのできる教師でありたい。

## たくましく生きようと

市街地の高層住宅で被災した麻子一家は、四月まで小学校の体育館で避難生活をしたのち、仮設住宅に入居。敬志は、小学生の兄を震災で亡くしている。幹男一家は、倒壊した文化住宅の下から助かったが、一か月後に父を交通事故で亡くし、二重の悲しみを背負う。奈央の母親は、地震の影響で腰を痛め、歩行困難になり、父は失職。……

どの子もつらい体験をしていた。暗い所を極端にこわがるようになった子、頻繁に爪噛みをする子、母親から離れなくなった子、ずっと泣いている子、全くしゃべらなくなった子……

幼児たちだけでなく、保護者も様々な問題をかかえて新しい地域に転入してくる。母親が歩行困難になったため、奈央の送り迎えは、父親がしている。父親は、担任や園長にも自分から話しかけてくる気さくな人柄である。五月のある日、園の近くで行う現地集合の「親子遠足」に参加しないと聞いた。理由を聞くと、バス代を出しかねている父親の気持ちがあった。そこで、目的地まで自動車で行く人に便乗させてもらう方法でその時は解決したが、そのことによって、被災された方々の深刻な状況を改めて知った思いであった。幼稚園を中心に、幼児相互のふれあいを通して、保護者同士の親睦も深まっていった。ほしいと願う、そのような場や機会を多く設けるように努めた。

奈央の父親は、その後、PTA廃品回収をすすんで手伝い、トラックに乗ったり、行事の手伝いを積極的にしたり、周りにかかわっていく努力をし、少しずつ地域にもとけこんでいった。

## 一時避難の幼児を受け入れて

被災地から一時避難の幼児を二名受け入れた。

明子は、自宅が全壊し、祖母宅で生活している両親から離れ、姉妹だけで北区の親戚に避難してきた。

明子は、本園在園児の健太とはいとこ同士なので、気が合い表情も明るく、他の幼児たちとも仲良く遊んでいる。余震がきた時には、こわがるのが度々あり、震災による心への影響が見られ、今後心のケアが必要であると思えた。両親は、一番大変な時期に明子を親戚宅に預けることができ、気持ちの上で安堵したようだった。

達夫は、自宅は全壊ではないが、ライフラインがストップしたということで親戚に避難してきた。

達夫の場合は、当時男児二十五名、女児八名という男児が圧倒的に多いクラスだったので、達夫が入園することで益々活気がでて、サッカー遊びがより活発になった。達夫自身の持ち味が、本園に、新しい風を吹き込んでくれたような気がする。達夫が自分で何でも見付けどんどん実践していき、力いっぱい取り組む姿に、仲間たちが心を寄せ、憧れを抱いた。

生活発表会では、力を合わせて「ペンギンの話」に取り組むことができた。

被災地の幼児を受け入れたことで、幼児たちも震災をより身近なものとして、受け止めることができた。と同時に、避難してきた幼児たちは、被災地を離れることでひとときだけでも、心をなごませることができたようだ。

からと幼稚園

「私は悲しくないの、お母さんが心配なの」

美咲ちゃんと出会う。震災から二か月後の寒い日。妹を背負っておられたお母さん。やっと幼児たちのためにと建てた家を震災で失い、命からがら冬の寒い朝に逃げたこと、あの日から今も不安で、美咲ちゃんとの手を放せないこと、家はもう元の場所に建て替えることのできないことや、毎日が虚しく、自分自身の気力もなくなり、園に近い主人の実家に身を寄せていることなどを、淡々と語られた。美咲ちゃんは、当時、私立E幼稚園の三年保育の年中組に在籍。春には、年長組になることを大変楽しみに待っていたようだ。か細い声で「あのね、私のお家もなくなつて、行つてた幼稚園は門も屋根も壊れてなくなつたの……」と涙ぐんで話した声が、今も心に焼き付いている。

四月、一年保育の幼児たちと共に入園式を迎えた。身の回りのことは一人で行けるが、おとなしく目立たない美咲ちゃんの不安げな落ち着かない様子が気になった。母親も、新しい環境に馴染めない様子が見えて、不安感がぬぐえない。

がんばりやの美咲ちゃんだが、母親の気持ちを受けたか、母親の姿を追って、保育室の入り口で涙ぐむ日が続いた。病気がちで、体格も一番小さく、声も小さいけれど、人一倍気を張り詰めている美咲ちゃん。「まだ悲しいの？ すみれ組の新しいお友達をつくって一緒に遊ぼうよ」と声をかけると、「私、悲しくないの、お母さんが心配なの、私が幼稚園に行っている間に、どこかへ行つてしまわないか心配なの」と答えた。

「お婆ちゃんも、お爺ちゃんも、私は大好きだけど、私の母さんが泣いているの……」家庭訪問の時の張

り詰めた母親の表情が、思い返された。ときおり送り迎えで来園される中で、お婆ちゃんは、礼儀正しく、丁寧で毅然とした元氣な方だった。突然に孫と暮らすことになったことを喜ばれながらも、孫が登園時間に遅れることを、氣にしておられた。

「前のお家のお母さんとお母さんが笑わない……」美咲ちゃんの心の訴えは続いた。みんなとは少しづつ遊んだり、お姉さんのように友達の世話をしたり、笑顔が見えてきても、画用紙に絵を描きかけでは、真っ黒な塗りつぶしを繰り返すのだった。

初夏になり、遠足に公園まで歩いて出掛けたときに、脈も早くなり、歩きにくくなり、とてもつらそうだった。心臓の疾患も気になったが、私の手をかたく握ってこらえて泣く姿に、極端な心の怯えが伝わってくるようだった。美咲ちゃんの心を少しでも軽くするには、私にできることは何か、どう受けとめればいいのか悩み、お母さんと話す時間を少しでも多くとるよう心がけた。幼稚園での美咲ちゃんの暮らしを話すうちに、母親の悩みや思いを聞くことも多くなっていた。繰り返し話を聞いているうちに、母親も少しずつ安定していき、やっと活力が感じられるようになってきた。

長い夏休みを前に、お婆ちゃんに美咲ちゃんの心を受けとめるひとつの手段として、「家で何か絵を描いたときは誉めたり、何の絵か聞いてあげてくださいね」と話すと、「夏休み絵日記」に、お婆ちゃんが美咲ちゃんと一緒に取り組んでくれた。二学期になってからは、絵も自信のある明るい色にかわってきた。数か月後、美咲ちゃんの家族は、新しい家を作るために動きだした。

## 自然あふれる環境の中で

つよしへ

つよしは、木津幼稚園に来て、一か月以上がたちましたね。

突然の地震で家がなくなり、こうしておじいちゃんの家に来て、慣れないことばかりだったと思うけど、よく頑張っていますね。

お友達もたくさんできてよかったですね。幼稚園では、アヒルの卵を見付けたり、ウサギの赤ちゃんを抱っこしたり、短い間にいろんな体験ができました。一年生になるのをみんな楽しみにしていますよ。

「母から子への通園ノートのメッセージから」

震災後、転入した幼児には、自然に恵まれた本園の環境が心の癒しになるよう、ウサギやカモ、チャボを放し飼いにし、命あるものに十分触れて遊べるように配慮したり、周辺の田畑に出掛ける機会を多くもったりした。

幼児の行動や表情からPTSD（外傷後ストレス障害）がないか観察を続けながら、三人の幼児とその保護者を温かく受け入れられるクラス作りに努めた。幼児の場合、震災という直接的なストレスよりも、環境の変化とその後の親の生活不安感やストレスから、二次的に障害が起きることが多いためである。

街なかにはない、のどかな雰囲気、生き物との触れ合い、ゆったりとした遊びの場と様々な遊具が幼児

の気持ちを引き付け、こちらの心配をよそに意欲的に遊ぶ姿が見られ安心した。

また、保護者にとっては、一見、震災の影響がないかに見える周囲の穏やかな環境や、実家に身を寄せられているという安心感から、気持ちも落ち着き、幼児にもよい影響を与えているように感じられた。

この頃、他の幼児の家庭にも親戚が一時的に避難したり入浴に来たりなどもあった。震災後二〜三か月の間、園区の人口が約二百人増えたと聞いた。(地域の商業施設調べによる)

なかでも、秋男と竜夫との出会いは、親密さを育む貴重な源であった。

華奢な秋男と体格のよい竜夫は、最初の日から、吸い寄せられるように意気統合して遊んだ。築山に登ったり、アニメのごっこ遊びをしたり。同じように、震災後転入してきた者同士、引き合うものがあるのかと感じるほど、短い期間ではあるが、交友関係を築くことができていたようである。

生活発表会の劇遊びでは、二人が、フック船長とピーターパンになって楽しく遊んだ。

人と人との心のつながり、結びつきによって、人は生きる力を得ていく。それは、幼児も同じであることを確信した。

木津幼稚園



## 「二階が一階になってもてん」

二日一日、震災後初めての自由登園日に、東灘区で被災した良君が、お母さんとお爺ちゃんと一緒に遊びにやってきた。良君は、震災ショックから心が不安定になっていて、お母さんが友達の中へ入れようとする、大騒ぎになり、無理強いすると大暴れする。良君は、お母さんから片時も離れられずに一日が過ぎた。母親の実家に避難し、成長している良君の姿を祖父母に示したいと焦るお母さんの気持ちを受けとめ、しばらく様子を見守っていくように話した。

翌日から、弟を加えた親子三人での登園が始まった。好きな遊びの場でも母親の側から離れられず、誘っても嫌がるばかり。歌をうたったり、スキップやゲームをしたり、絵を描いたりしても参加しない。「慣れにくいんです」と申し訳なさそうに話すお母さん。まずは親子との信頼関係を築くことと思ひ、できるだけ家庭訪問をするようにした。ようやく、「しっぽ取り」に参加できるようになったある日、「ぼく」とこ、二階が一階になってもてん」とぼつんと話した。様子が理解できないクラスの友達と、良君の気持ちを思うと一瞬ことばを失ってしまった。

「良君が歌わへんのは、恥かしいからかなあ」「来たところから、歌がわかってからうたうんかな」と見守り、男女対抗の「しっぽ取り」で、お母さんと手をつないで参加している良君を「男の子チーム」「お母さんは女の子やねんで」となんとしても味方にしようとする譲らないクラスの友達の中で、まずお母さんの気持ち安定していったことが、良君の安定につながっていった。

豊かな自然、そしてクラスの友達の間で生活することで、親子共に再出発への力を育

んではしいと思った。

### 手紙

何より心配していた小学校ですが、おかげ  
さまで元気に通っております。

一年一組で、クラスのお友達では、謙君だ  
けが一緒でしたが、この一人がいるといない  
とは大違いでした。良は、何をするにもう  
まくできるだろうか、と不安たつぷりで臨む  
タイプですが、彼のおかげでとても心強かつ  
たようです。学校にもすぐ馴染み、お友達も  
たくさんできました。すっかり元にもどった  
感じですが。がんばって幼稚園に最後まで通っ  
たおかげだと思っております。

子供が元気になると、不思議なもので私ま  
で元気が出てきます。親なんて単純なものだ  
と思えます。



岩岡幼稚園

#### 四 強い心をもった小学生になつてください

「いつまでもお空から見ていてください」

震災による園舎倒壊のため、保育は、隣接する小学校の一室を借用し、二月十三日より実施していた。周りを書架に囲まれたこの教室では、八十一名の修了式（卒業式）を実施するのは手狭すぎた。

三月十八日に修了式を控え、早急に園児・保護者全員を収容できる式場を探さなければならなかった。

しかし、地域にある小・中・高等学校の特別教室や体育館は被災者であふれており、また、公民館や公会堂も被害が甚大で、式場として借用することはできなかった。

近隣の児童館がほとんど被害もなく使用できることを聞き、早速出向いて借用を依頼した。そこは、児童館のプレイルームで広さも適当であり、幼稚園から一キロメートルほどのところにあつた。

「こんなときですからお互いさまです」と児童の使用時間をずらし、快く借用を許してくださった館長さんの気持ちがうれしくあつた。

幼児たちにとって、一生に一度しかない幼稚園の修了式。こんな非常時だからこそ、よけいに心温かく送り出してやりたかつた。園児用のいすは園舎からなんとか取り出せたものを、保護者用のおりたたみいすは中学校から借用して、地震で傷みの激しい道路を、教職員が台車で何回も往復して児童館まで運んだ。借用した花器に花を生け、パンジーの鉢植えを並べて幼児たちの花道をつくつた。式場の雰囲気は少しでもやわらげばと思ひ、半壊の園舎の廊下から運びだした幼児たち一人一人の額入りの顔写真を飾つた。そ

して、なんとか持ち出せた御影幼稚園の象徴である園旗を置き、多くの人々の善意に支えられて、質素ではあるが、心のこもった式場を整えることができた。

三月十八日の修了式当日は、遠方に疎開していた幼児たちも参加し、震災以来初めて在籍するほとんどの幼児が顔をそろえて行われた。震災で亡くなった二人の女児も、黒いリボンを付けた写真で出席した。

震災の犠牲者に対する黙禱で式が始まり、子どもたちは、胸を張って修了証書を受け取った後、「お空のお星様」になってしまった二人の友達に「いつまでも、ほくたちわたしたちをお空から見ているください」と別れのあいさつをした。大好きだった「僕らは未来の探検隊」の歌を高らかに歌いあげ、明日への希望を胸に御影幼稚園を巣立っていった。

平成六年度 御影幼稚園長 南 佑子



## 修了式式辞

皆さん ご修了おめでとうございます。

今日は遠いところからたくさんのお友達が、この修了式のために帰ってきてくれましたね。この間の地震で、皆さんの大切なお友達の杉本みほちゃんと伊原理恵ちゃんが亡くなってしまい、もう会えなくなっていました。幼稚園もつぶれてしまい、本当に残念ですね。

この地震は、とっても恐ろしい出来事でしたけれど、全国のたくさんの人たちに励ましてもらった、大変お世話になりました。

皆さんは、そんな人たちに心をこめて「ありがとう」のお礼のお手紙を書きましたね。これからは心からありがとうと感謝のできる人になれるといいですね。

また、この地震で皆さんのお家がつぶれたり、お友達と遠く離れてしまったりなどの困ったことがたくさんありました。皆さんは元気で頑張っていますね。どんな困ったことがおきても、くじけずに頑張れる強い心をもった小学生になってくださいね。

杉本さんや伊原さんも、きつとお空の上から皆さんを応援してくれると思いますよ。

それでは、お家の方にお話しますから静かに待ってくださいね。  
保護者の皆様、お子さまのご修了おめでとうございます。

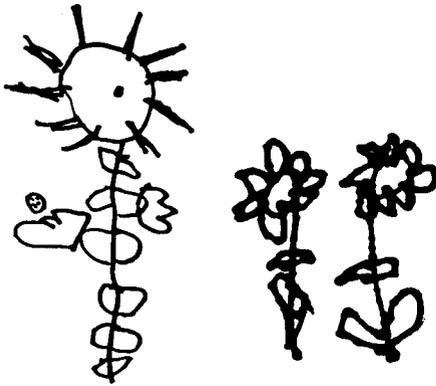
阪神・淡路大震災により園舎は倒壊してしまいましたが、御影小学校の藤岡校長先生、浜御影児童館の石田館長様のご厚意のお陰で、無事今日の日を迎えることができましたことを誠にありがたく存

じております。

昨年は、御影幼稚園創立百周年の大きな節目の年でございました。この大きな節目の年にこのような震災に出会うとは、その巡り合わせの不思議さに驚くばかりでございます。どうぞ今後とも幼稚園のために、一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

お子様のご多幸と健やかなご成長をお祈りしましてあいさつにかえさせていただきます。  
最後に、一年間本当に有難うございました。

平成七年三月十八日 御影幼稚園長 南 佑子



「ここまでとんでいくの」――願いを風船に託して――

当初は、二百名余りの人々が、園舎、園庭に避難し、保育室、遊戯室、保健室がすべて使えない状態。建築物の九割近くが全壊という最も被害の大きかった地区で、二十四名の幼児のうち、自宅や近隣の避難所に残っている幼児は、数名。実家や親戚、友人宅にと避難していた幼児や教職員の安否は、電話等で確認していたが、やはり姿を見るまでは心配だった。その後、休園措置をとり、教職員は、避難者の世話や環境整備にあたり、二月二十四日から保育を再開した。

三月に入り、少しずつ登園してくる幼児が増えてきたが、まだ半分にも満たなかった。避難者の方が、園舎、園庭の清掃をしたり、また避難者と幼児とのふれあいの会や、交流の場を多くもったりして、お互いに励まし合い、助け合っていた。

「一年の締めくくりである修了式は、ぜひ幼稚園に帰りたい」という保護者の強い希望を聞き、なんとか一生の思い出に残る式にしたいと考えた。避難者、ボランティアの方々から「私たちも、幼児のために何かしたい」という申し出があった。

二か月ぶりに、二十四名全員がそろった修了式。幼児も保護者も、久しぶりに元気な姿に接し、無事再会できたことを喜び合った。大震災以来、満身に保育ができなかったが、修了式に、全員そろって参加できたことは最高の喜びであった。保育室での修了式も初めてであったが、避難者やボランティアの方々など、大勢の人々の祝福を受け、とても感動的な式となった。

修了式後に、これからの神戸の復興を願って、幼児、保護者、避難者、ボランティア全員で風船を飛ば

した。

「この子たちの未来に、よいことがありますように」と祈りながら、空高く上がっていく色とりどりの風船を見ていた。「どこまで、飛んでいくの？」

幼児たちも、風船が見えなくなるまで見送っていた。その後、愛知県の方から「明君の風船が届いた」とお便りをいただいた。

お別れ会では、避難者やボランティアの方々が、幼児や保護者のためにおいしい料理を作ったり、手作りの紙芝居やバルーンショーをしたりして、幼児の修了を祝ってくださった。

この度の震災は、幼児にとってはつらい経験ではあったが、大勢の方々の温かい心にふれ、命の大切さ、生きることの喜びを学ぶことができた。これからも明るく誠実にやさしい心をもって、精一杯生きていってほしいと願っている。



平成六年度 西郷幼稚園長 奥田 禮子



再会—みんな元気に笑顔で会えました。うれしかった！